

# 新病院長に聴く

地方独立行政法人山口県立病院機構  
山口県立総合医療センター院長  
第13回 武藤正彦先生



平成26年度から始めました本会報の「新病院長に聴く」の第13回目として、平成30年4月に山口県立総合医療センターの病院長に就任された武藤正彦先生へのインタビューは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、書面による質問に回答していただくという形式で行いました。

令和2年6月末、武藤先生に山口県立総合医療センターの概要や理念、COVID-19を含めた感染症への取組み、山口県立総合医療センターが山口県の医療で担う役割などお聞きしたい旨を書面でお伝えしました。ご多忙にもかかわらず、先日お返事をいただきましたので、原文のまま掲載させていただきます。

広報委員 川野 豊一

私は、山口県立総合医療センターには2018年4月1日付けで院長に就任いたしました。前任の前川剛志先生（第8代）の後任となります。初代の村田文二院長（1953年10月退任）が私の家内の祖父であったことも何かの縁であるのかと思いを馳せ、お引き受けすることに決めました。

当医療センターの病院の規模は一般病床が490床で、第一種および二種の感染症患者を収容できる感染症センターには14床がある。昨年来、猛威をふるっている新型コロナウイルス感染症患者の措置入院でもこのセンターが活躍している。院内感染を予防する観点からも、別棟になった構造は非常に良かったと思っている。ドライブスルー方式での検体採取もかなり手際が良くなってきた。当感染症センターは、昭和58年2月28日に、山口・防府地区隔離病舎組合を開設者として設置され、その後当時の山口県立中央病院に移管さ

れ現在に至る歴史を刻んでいる。設立当初は、赤痢や腸チフスなどの細菌感染症が主な対象疾患であったことを考えると時代の変遷を感じる。21世紀は感染症との闘いであると人口に膾炙されて久しいが、今回の新型コロナウイルス感染症は、まさに自然界から人間界への警告とも受け取れる挑戦である。地球温暖化に伴い、これまで地中で眠っていた種々の細菌やウイルスの類が虎視眈々と人間界への闘いのチャンスを窺っているに違いない。社会経済の観点からみると、感染症による新たな産業革命の幕開けといえよう。46億年を生き抜いてきた地球への環境ケアを考えた新しい経済理論の探究が必要な時期の到来であると言い換えてもよい。

2060年代になれば、日本の将来人口は現在のおよそ1億2,000万人から8,500万人ほどに減少すると推計されている。東アジア全体の人口の

動きも同様と予想されている。人口構造の劇的変化の内容を解析してみると、生産年齢人口および出生数の減少、それに対して高齢者人口が増加する構造となっている。少子高齢化社会における医療提供体制の在り方を地域医療計画の枠組みの中で再検討しなければならない。即ち、脳卒中・循環器病・がんなど疾患領域毎に、一方で高度急性期・急性期・回復期・慢性期の機能別に、二次元的に地域別に描き出し、どの様な医療提供体制がその地区の住民の健康の維持管理に相応しいといえるのかを議論する必要がある。単なる数合わせの議論は意味がない。今回の新型コロナ禍で確かに病床数にゆとりが必要なことも理解はできたが、他方、規模のいかに問わず病院は生きていくためには黒字経営を継続させていかないと職員の日々の生活を支援できないのである。当医療センターも例外ではなく、人件費が重くのしかかってくるので、医業収益増のため病床利用率を一定の高いレベルで維持していかなければならない。1,100人ほど在職している職員にしっかりと働いてもらうためには、それに見合った賃金報酬を支払う必要がある。そうしないと、優秀な人材を確保することができない。また、看護師の離職率を低く抑えるための方策も極めて大切だと日頃から思っている。私も、看護師の就職説明会には時間が許す限り参加して若い人々の感性はどうか、を知るように努力している。他方、当医療センターは2011年に地方独立行政法人型の組織となり、それぞれの職種内の採用人員数には自由度が与えられている。初期臨床研修医の採用枠の拡大など病院の経営状況に応じて許せる範囲内で決定していくことができる点は魅力である。今、働きながら研究をしたい（学位をとりたい）医療人を山口県内に定着させていく術を模索している。このことが、山口県の医療を支えていく基盤整備に繋がるものと信じている。

現在、当医療センターでは第3期中期計画（2019年4月～2023年3月）がスタートした。県立病院として対応すべき医療の充実を図るとともに、県内の医療水準を高める取組を推進せよ、とうたわれている。もちろん、期間内の黒字経営を維持できるように、病院機構本部と連携しながら

ら経営戦略を立てていく必要がある。そのために、月に一度の頻度で外部からの経営コンサルタントにも加わっていただき、病院経営戦略会議を開催している。白熱した議論の応酬でなかなか面白い。子供から成人までの世代を視野に入れ、どのような形の良き医療提供体制を後世に可視化して残していくか、私たち60歳代の病院管理職に課された問題は非常に大きい。でも、「昔は良かった」という弱音の言葉は発したくない。

趣味としてはゴルフをするわけでもなく特記すべきことは何もないが、10年ほど前に那覇空港の売店で買った小さな「ガジュマル」の樹は、私と苦楽を同じくして今では院長室にて独特の根の形態を露わにしつつ幹を大きくしながら生き延びている。毎日の水遣りが私の役目であり、精神衛生にもなっている。

荒ぶる「天」ではなく、慈愛に満ちた穏やかな「天」であることを祈るばかりである。ようやくの梅雨明けとクリスタルクリアな青い空の下、街路樹からのセミの声のシャワーの到来であるが、早くも秋の気配を感じる季節がそこまで来ている。

最後になりましたが、山口県立総合医療センターへの倍旧のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2020年8月7日 立秋

#### 県下唯一の医書出版協会特約店

医学書専門 井上書店  
看護学書

〒755-8566 宇部市南小串2丁目3-1(山口大学医学部横)  
TEL 0836(34)3424 FAX 0836(34)3090  
[ホームページアドレス] <http://www.mm-inoue.co.jp/mb>  
新刊の試覧・山銀の自動振替をご利用下さい。